

山東の新石器時代における 近年の考古学的発見と研究

孫 波^{*}

訳 種村 由季子

山東の現代考古学は、新石器時代の研究に端を発する。すなわち1930年代初めに当時の中央研究院歴史語言研究所によって行われた城子崖遺跡の発掘である。これにより山東の考古学研究は正式に幕を開けることとなった。以来およそ一世紀にわたる努力を経て、我々の研究は大きな成果をあげ、特に古代文化の発展系譜については、中国国内で最も高い完成度を誇る。これらの功績のもと、中国の考古学が転換点を迎えるにあたり、山東の新石器時代における考古学もまた、近年、新たな展開を見せている。

一、山東省の地理について

山東省は、中国大陸の東部に位置し、東は膠東半島が渤海と黄海の間に深く突き出し、海を隔てて北側に遼東半島、東側に朝鮮半島と日本列島を望む。西は華北大平原の一部をなして河南省、河北省と境を接し、南は江蘇、安徽両省の北部にある淮北平原に隣接する。このため歴史上、特に商代以前の遺跡に関して、現在の行政区域としての山東省だけでは黄河下流域の東方文化全体を括ることができない。そこで考古学者らは、これらを「海岱歴史文化区」として提唱したのである⁽¹⁾。新石器時代における海岱地区は、現在の山東省のほか、河南省東部及び江蘇、安徽両省の北部を含めた範囲を指す。

山東は、北温帯の大陸性気候に属し、四季があり、夏と冬は長く、春と秋は短い。降水量は乾湿二季に分かれ、春と冬は乾燥して寒く、夏と秋は蒸し暑い。この高温多雨の環境が農業に大変適しており、年二回の収穫が可能である。また、季節風気候のため、夏は東南の湿った季節風を受けて、降水量は東南から西北に向かって低くなり、冬は西北の乾燥した季節風が吹きつけ、気温も西北から東南に向かって高くなる。

地形は、省のほぼ中心に泰山、魯山、沂山が連なり、膠東丘陵が東に伸びて半島を形成し、北と西を華北大平原と黄淮平原が取り囲む。また、泰山、魯山、沂山は、山東省を南北に隔てる境界線としてだけでなく、河川の発源地でもあり、渤海と黄海の分水嶺となっている。これらの山脈の南北両側では地理環境が大きく異なり、北側は魯北平原、南側は丘陵や低い山地が分布し、古くから互いに異

※山東省文物考古研究所

(1) 高広仁、邵望平『中華文明発祥地之一—海岱歴史文化区』（『史前研究』1984年第1期）。

なる文化が形成されてきた。齊と魯の区別もこの地理的環境に起因する。

このように、各地で異なる自然環境の中で、人々はそれぞれ風土に適した文化を育んでいった。だが、これらの文化は、互いの差異よりも共通点のほうが圧倒的に多い。これは、先史時代の山東地域が大変安定しており、各集落が開放的で密接な交流を行ったため、このような比較的独立した文化圏が形成されたと考えられる。

二、これまでの考古学的成果

長年の研究の末、山東の新石器文化の系譜は、八十年、九十年代にはすでにほぼ解明され、後李文化から北辛文化、大汶口文化、そして龍山文化へと発展していくことが分かっていた。その絶対年代は紀元前 6000 年頃から紀元前 2000 年頃までである。この研究の成果をもとに、我々は新石器時代の社会について大まかな発展過程を浮き彫りにすることができる。文化と社会の発展段階は、極めてよく似た傾向があるのである。

後李文化は、今からおよそ 8500 ~ 7500 年前に泰沂山脈の北側山麓の黄土地帯に分布し、現在までにおよそ二十ヶ所の遺跡が発見されている。後李文化の土器はいずれも夾砂陶で、紅陶を主とし、器形は釜類が最も多く、ほかに罐、盆、鉢、壺、箕形器、盂などがある。石器の製作技術は非常に発達し、磨製石器は大変精巧で、斧、鏃、鑿などがあり、また石磨盤、石磨棒も見つかっている。

後李文化遺跡の多くは河岸に分布し、頻繁な移動のため遺跡面積は広範囲にわたる。中には数十万 m²にも及ぶ大型の遺跡も少なくないが、同時期の集落面積はそれほど広くない。集落は通常、居住区と墓地の二つに分けられる。墓地は章丘市にある小荊山遺跡を主要遺跡とし、三列に並んだ列状墓群が発掘されたが、副葬品などは見つかっておらず、平等で秩序立った原始氏族社会であったことが分かる。居住区は比較的広範囲に分布しており、保存状態の良い房址が多数発見された。房址はその規模によって二つに分類される。まず、大型の房址は、灶（かまど）と土器一式を備えたものが多く、建物の造りは頑丈で、面積はおよそ 40 ~ 50m²、最大で 70 ~ 80m²のものが見つかっており、室内は用途に応じて寝室、食堂、物置など明確な区別がある。また、小型の房址は、建物の造りが比較的脆弱で、灶やまとまった土器はなく、室内の区分は曖昧で、面積は 20m²に満たない場合が多い。

後李文化は、多数の集落から構成されるが、集落間の統一性はあまり強力ではない。集落全体を統括するような中心的組織の存在も確認されておらず、離散型で開放的な集落の集まりであったと考えられる。対照的に、個々の集落内では、多数の生活単位による緊密で秩序立った社会が形成されており、人々は共同の経済生活を営み、互いに一定の社会責任を負っていたであろうことが発掘調査により明らかになっている。

後李文化は、農業の初期段階及び集落の発生段階にあり、資源の開発レベルは低く、周辺の自然環境への依存度が高かった。遺跡は主に山前平原の河畔地帯に分布しており、水源だけでなくそのほか様々な資源を附近の山河に依存していたことが分かる。これは、当時遠方の資源を調達する手段と能力が不足していたこと、また資源の利用が直接的或いは簡易的で、高度な加工能力に欠けていたことを示している。特に、遺跡規模の巨大さや貧弱な文化堆積層、分散した複数の集落の存在は、頻繁な移住による農業生活を反映しており、その背景には、人口増加がもたらす土地不足への不安以上に、農業における土地資源利用の効率の低さが直接の原因にある。原始社会の開発能力の未熟さと、環境適合性の低さが端的に現れている。

北辛文化は、今からおよそ 7500 年 ~ 6100 年前に山東省全域にわたって分布し、現在までに百ヶ

所以上の遺跡が発見されている。

集落の全貌は明らかになっておらず、房址の多くは小型の単室構造で、楕円形や円形が多く、ほかに方形のものもある。竪穴或いは浅竪穴式住居を主とし、晩期には平地式住居が増加する。墓葬は土坑墓と陶棺墓の二つに大別され、石棺墓も少数だが存在する。ほとんどの墓には副葬品がなく、少数の墓にのみわずかに一～三点の副葬品が見つかった。墓内の副葬品は性別による区別があり、男性は骨鏃や矛等の武器、女性は主に身の回りの生活用品が埋葬されていた。

土器は泥質陶より夾砂陶のほうが多く、ほかに蚌（からす貝）や雲母、滑石の細片を混入した土器が少数発見された。器色は紅褐陶、紅陶、灰黒陶が多い。器表は主に無紋だが、夾砂陶は比較的紋様のあるものが多く、附加堆紋、刻画紋、圧印紋、錐刺紋などがあり、ごくわずかだが彩陶も見ついている。器形は主に鼎、罐、釜、小口双耳罐、鉢、支脚などで、特に鼎と鉢が散見される。石器は鏟、斧、鏹、鑿、刀、鎌、石磨盤、石磨棒、鏃などがある。

現在得られている資料では、北辛文化の社会について詳しく解明することは難しい。ただ、北辛文化は淮河流域の裴李崗文化との強い関係性が見受けられ、山東地域の社会の発展に外部の環境が大きく影響するようになったことが分かる。

大汶口文化は、今からおよそ6100年～4600年前に山東省全域にわたって分布したほか、隣接する江蘇、安徽両省の北部及び河南省の東部、中部にまで広がっており、洛陽でも発見報告がある。遺跡数は千ヶ所にのぼる。面積、数共に北辛文化と比較して飛躍的に発展したと言える。

土器の製作技術も発達し、ロクロのような回転台が現れた。初期の彩陶は特色が豊かで、代表的な器形は鼎、觚形杯、豆、鬲、盃、背壺、大口尊などがあり、非常に精巧で種類も豊富である。玉石器は主に鏟、斧、鏹、鑿、刀、鉞、鏃などで、ほかに各種装飾品があり、さらに象牙の加工品（雕筒、獐牙勾形器、骨梳）なども見つかっている。

集落は統一性が強まり、居住区と墓地が分かれている。住居は平地式と竪穴式があり、面積は10～20㎡ほどでありあまり広くなく、方形のものを主とするが、円形も散見される。墓葬は主に集団で埋葬され、数も比較的多いが、墓地内はさらに複数の墓群が存在している。墓葬は基本的に全て長方形の土坑墓で、東向きのもが多く、中には二層構造の墓もあり、棺槨が登場する。初めて手厚い埋葬が行われるようになるが、副葬品の数や質にそれほど大きな差はない。また体質人類学の観点からは、抜歯や頭骨の人工変形、小さな球状の塊を口に含むといった独特な習俗の存在が報告されている。

大汶口文化はおよそ千五百年続いたが、その間平等社会から階級社会へと変化していった。早期の社会はほぼ平等で、集落内の統一性は比較的強く、住居は極めて秩序正しく整然と並び、差別はさほどなく、共同の活動広場があり、居住区内には灰坑や窖穴といったほかの遺構はあまりない。基本的に厳格な氏族社会の原則に従っており、不平等な現象はそれほどないが、例えば大汶口遺跡など少数の主要遺跡では、墓内の副葬品に大きな格差が見られ、大型の墓では副葬品の数や種類が豊富で良質なのに対し、小型、中型の墓では品質の劣る副葬品が数点あるだけか、或いは副葬品が全くなかった。中期の段階になると、このような不平等な現象はさらに激化、拡大し、大型の墓では玉器や象牙の加工品も登場するようになる。さらに晩期には、新たな集落形態が出現し、社会の矛盾はすでに大規模な武力によって調整、解決しなければならぬ段階にまで達した。この頃になると、貧富の差は中心集落だけでなく一般の集落にまで広がり、元々平等だった社会は多くの階層によって細分化され、より複雑で明確な社会階級の形成に向かって新たな時代を迎えつつあった。

龍山文化は、今からおよそ4600年～4000年前に存在し、分布範囲は大汶口文化とほぼ同じだが、遺跡数は三倍にのぼる。

精巧な黒陶土器の出土で知られ、中でも卵の殻のように薄い高柄杯は龍山文化の最高傑作である。回転台による成形技術が普及し、鬻、鬲、甗の袋足部分も回転台を用いて製作できるようになった。器形はほかにも鼎、盆、罐、壺、尊、壘、杯、盤、豆などがあり、種類や形、デザインが多種多様化し、土器の製作技術は先史時代において最も著しく進歩した。中でも酒器、食器、炊器、盛器はおそらく全てに明確な区別があり、用途別に特化していった。

また、農業生産も急速な発展を遂げた。稲作が広く行われるようになり、これに応じて人口の増加と開墾面積の拡大、一戸あたりの人数の減少が進んだ。手工業では、土器の製作が高度に専門化されただけでなく、生産の分業化も進み、回転台が広く使用され、豊富で多彩な器類や器形が登場し、特に磨光黒陶は龍山文化を代表する存在となった。玉石器はあまり見つかっていないが、礼制化の流れが顕著で、西朱封遺跡出土の玉器を代表とする彫刻技術は、先史文化の最高峰である。

龍山文化では、集落の数だけでなく、集落内の人口や人口密度も急速に増加し、新石器時代のピークに達した。集落はより一層階層化が進み、各地に都市が出現した。遺跡はこれまでに十二ヶ所で発見されており、都市が中心となって周辺の集落を先導し発展していくパターンが一つの新たな社会傾向となり、集落を代表する都市間の連絡も強化された。これは地域社会の発展に非常に大きな影響を与え、社会の階層化にさらに新たな兆しをもたらした。すなわち、墓は純粋な富の誇示から脱却し、手厚い葬儀の風習は次第に失われ、代わりに大型の墓の中は、墓内の空間面積や棺槨、玉器や土器にこだわるものや、副葬品の品質や配置をより重視するものが現れ、社会階級を顕示する手段はますます制度化されていった。

三、近年の考古学上の新発見

1、龍山文化の年代学における新展開

山東の龍山文化は、新石器時代末期⁽²⁾に大汶口文化から発展し、のちに岳石文化に受け継がれていった。具体的な年代は今からおよそ4600年～4000年頃とされるが⁽³⁾、最新の年代学研究によれば、山東の龍山文化の開始時期は中原の龍山文化と共に従来の計算より二、三百年遅れ、今からおよそ4300年～3800年頃と言う⁽⁴⁾。しかしながら、山東の龍山文化はおそらく二里頭文化の一期まで続いているため⁽⁵⁾、その終末時期は中原の龍山文化より遅く、二里頭文化の最新の上限年代である紀元前1750年まで延長される可能性があり⁽⁶⁾、最長だと二里頭文化一期を超えて紀元前1700年まで続くと考えられる。もしそうだとすれば、山東の龍山文化の年代は従来よりも六百年長く、新たに紀元前2300年～紀元前1700年となり、これは出土土器の推定年代ともちょうど一致するのである。

2、新石器時代早期文化の開始とその発展

扁扁洞遺跡の発見は、山東の新石器時代文化の起源と発展の研究に初めて明確な糸口を与えた。この発掘調査により、山東は初めて他地域の新石器時代早期文化との比較材料を手にし、相関的研究の

(2) 中国においても龍山文化を銅石併用時代と位置づける学者は少なくない。嚴文明『論中国的銅石併用時代』(『史前研究』1984年第1期)参照。

(3) 樂豊実『海岱龍山文化的分期和類型』(樂豊実『海岱地区考古研究』山東大学出版社、1997年6月第1版)。

(4) 近日出版の『中華文明探源工程(二)』「年代学課題結項報告」参照。

(5) 樂豊実『海岱系文化在華夏文明形成過程中的作用—從海岱、中原兩大文化区系的相互關係談起』(『華夏文明的形成与發展』大象出版社、2003年10月)、方輝『二里頭文化与岳石文化』(『中原文物』1987年第1期)。

(6) 仇士華、蔡蓮珍、張雪蓮『關於二里頭文化的年代問題』(杜金鵬、徐宏主編『二里頭遺址与二里頭文化研究』科学出版社、2006年12月第1版)。

立脚点を得たのである。

扁扁洞遺跡は、沂源県張家坡鎮の北桃花坪村の北側にある山崖の西壁に位置し、地理座標は北緯36度3分42秒、東経118度28分17秒、海拔389メートルである。洞窟周辺は生活に適した環境で、多くの泉があり水量も豊富で、長年枯れたことがない。洞窟内の地層は八層に分かれ、うち四層が文化堆積層、残り四層が自然堆積によるものである。遺跡からは灰坑、焼土面、焼土坑、灶坑などが見つかっている。

出土品は主に土器や石器、骨器で、数は非常に少ない。土器は破損がひどく、復元は困難である。また、土器はすべて夾砂陶で、紅陶を主とし、焼成温度は低く、器厚は厚くて紋様がない。土器片の多くは表面が平たく滑らかで、中には削った痕跡もあり、整形加工されたものと思われる。破片から判別が可能な器形は、釜と鉢の二種類のみで、器腹はやや深く、円底と平底の二種類があり、平底が多い。石器はあまり発見されておらず、石磨盤一点と石磨棒二点のほか、数点の簡単な石片や石核、断片などが見つかっただけで、整形された石器はなかった。骨器は錐、鏢や針が見つかっており、磨製で、針の後端に針穴があった。ほかに動物の肩甲骨一点が出土し、翼端を削り取って磨製加工を施したもので、形状は骨鏟に似ている。おそらく加工途中段階の半製品であろう。

人工物以外の出土品では、動物の骨が最も多く、ほとんどがひどく損傷しているのは、人の手で叩き割られたためと思われる。中には焼いた痕跡のあるものも見られた。これらの獣骨は、明らかに狩猟によって得た獲物で、小型、中型の哺乳動物を主とし、特に鹿類が多い。浮遊選別によって検出された植物遺存体は少なく、ほとんどが可食種子で、石磨盤や石磨棒に対する予備検査では、堅果類と思われるデンプン粒がわずかに一粒のみ検出された。

遺跡の推定年代は、新石器時代早期で、具体的には今からおよそ9500年～10000年ほど前である。



扁扁洞遺跡の発掘現場

扁扁洞遺跡は、洞穴遺跡の一種で、遺跡の面積は当時の集団規模を反映して小さい。穴居生活は明らかに旧石器時代から受け継いだもので、当時すでに新石器時代に入っていたが、生活方式は前時代の影響から抜け出せず、住居の建築能力はまだ低かった。

遺跡内からは大量の獣骨が発見され、また採集経済に欠かせない石磨盤や石磨棒も見つかっている。骨鏢が発見されたことから、魚類が食物資源として利用されるようになったと考えられるが、狩猟用の道具である可能性も否定できない。農具と思われる出土品も発見されたが、さらに調査が必要である。また、もし当時すでに農業が開始されていたとしても、作物の馴化程度や作付け規模、農業技術などの条件はまだ初期の段階であり、食糧供給源としての農業の比重はそれほど高くなかったはずである。さらに、扁扁洞遺跡は比較的高い場所に位置しており、耕作可能な山麓の土地からはやや離れているため、農業には不向きである。これは、集落の居住地選択に際し農業生産に対する視点がまったく考慮されていないことを示しており、当時の先住民にとっては、やはり狩猟や採集が主要な経済活動であったと言える。

扁扁洞遺跡の発見と数度に及ぶ発掘調査は、山東の新石器時代文化の起源と発展の解明に重要な手がかりを提供しただけでなく、魯中山区における旧石器時代から新石器時代への過渡期の文化や農業の起源について研究する上でも大変重要な意義を持つ⁽⁷⁾。

3、集落考古学上の新発見

(1) 西河遺跡

西河遺跡は、章丘市と済南市歴城区の間にある巨野河支流西側の河岸に位置し、西は城子崖遺跡から1.6km離れた場所にあり、面積はおおよそ40万㎡である。1997年と2006年に二度の正式な発掘調査が行われ、おおよそ2500㎡の後李文化の集落を発掘した。

この集落は、遺跡中心部から西寄りの場所にあり、全部で二十余基の房址が発掘され、灰坑も少数見つかっている。房址は大小の二つに分類され、大型のものは面積が20～70㎡ほどで、形状はよく整い、間口に対して奥行きが長い隅丸長方形で、床面と壁は加工が施されている。室内には通常三点一組の灶が設けられ、主副の区別があり、土器の釜が置かれたままの灶もあった。また、床面から完全な形の土器が多数発見され、特に部屋の隅で多く見つかった。さらに、石磨盤、石磨棒、錘、斧、砥石など穀物加工や工具製作を目的とする石製工具も発掘されている。小型の房址は、面積が通常10～20㎡ほどで、床面や壁に加工された痕跡はなく、灶がない。完全な形の土器は発見されていないが、散乱した土器片が一部の房址から見つかっている。また、石片や石塊が大量に発見されており、石器を製作する過程で出た石屑と思われる。このことから、これらの小型住居は貯蔵室或いは専用の作業場として使われていたのではないかと推測される。主寝室である可能性も否定できないが、生活に必要な設備がまったく揃っていないことは明らかである。

西河遺跡では、生活単位を基礎として組織された集落景観が展開されたと見られる。すなわち、大型の住居は生活設備を完備し、生活の中心の場として機能して、外部から独立し、小型住居は、大型住居の共有の付属施設として、南側で管轄下に置かれたのである。

(2) 黄崖遺跡

黄崖遺跡は、沂源县土門鎮の黄崖村東部の河畔に位置する。多くは破壊に遭っているが、わずかに洞部入口のみ原形を留めており、三層の堆積を確認、すべてL（リター）層であった。出土土器は少なく、釜、鉢、鼎などが発掘された。土器は夾砂陶を主とするが、鉢は泥質陶である。器色は紅色や

(7) 孫波『扁扁洞初識』（安徽文物考古研究所編『文物研究』 第16輯、科学出版社、2009年）。

紅褐色が多く、一部褐陶や黄褐陶、灰褐陶を発見、またごくわずかだが黒色に近い土器も見られた。焼成温度が低く生地にむらがあり、表面が紅褐色で内側が灰褐色の土器片も発見されている。硬度は褐陶や灰褐陶のほうが紅陶や紅褐陶に比べやや高い。

黄崖遺跡の推定年代は今からおよそ7200年前で、北辛文化早期にあたる。出土した釜はほぼ全て口縁端部を折り返して肥厚させており、形状はよく整っていて、後李文化の直接的な影響を受けていることは明らかである。また、新石器時代中晩期における洞穴遺跡としても特殊な存在であり、当時の人々の行動様式の多様性をよく示している。



黄崖遺跡の地層堆積

(3) 大汶口遺跡

大汶口遺跡は、中国国内でも著名な考古遺跡で、これまでに三度の大規模な発掘調査が行われている。特に1959年の考古学的発見は、当時の学会に衝撃を与え、中国先史時代の社会性質と発展水準に対して大きな論争を巻き起こした。

2012年から2013年には、国家考古遺址公園の建設に合わせて山東省文物考古研究所による四度目の発掘調査が行われ、大汶口文化早期の居住区を発見、保存状態の良い七基の房址が整理された。

発掘区は、大汶口遺跡内の汶河北岸の中間部に位置し、前述の七基の房址は、当該居住区の東側一帯にある。さらに東には窪地を埋め立てた土地があり、この集落一帯の共同の活動広場になっていたようである。発掘調査から、この居住区が極めて整然と区画され、非常に強力な整合性を持っていたことが分かった。各房址の形状は全てほぼ均一で、方形の平地式住居、面積は4.2メートル平米前後である。各房址間の空間面積も統一されており、厳密な区画整備が行われていたことを示している。また、倒壊した房址の堆積土と室内の床面から、土器、石器、骨器、獣骨などの大量の出土品が発見された。土器は鼎、罐、釜、鉢、壺、鉢、缸などがある。石器は房址上層部の焼土堆積層から多く発掘されたが、ほとんどが損傷しており、器形は石斧、石磨盤、石磨棒、そのほかやや大きく未加

工の平たい石片もいくつか見つかった。

各房址の上層部には全て大量の紅焼土が堆積しており、範囲は房址の形状とほぼ一致する。さらに、紅焼土中に土器や石器の破片が紛れていること、破片に二度焼いた痕跡が見られることから、この集落は火災によって焼失したものと推測される。その後、焼け跡を一掃し、新たに整備し直したのであろう。だがどういうわけか、新しく生まれ変わった土地は利用されないまま、この集落は汶河の南岸に移っていった。これについてある専門家は、汶河の南岸が元の居住地である北岸に比べて非常に高い場所にあることから、水害から避難したのではないかとの見解を示している。



大汶口遺跡の発掘現場

(4) 龍山文化遺跡

龍山文化遺跡は、先史時代における社会の発展の最高形態とされ、各地で続々と多くの新発見がなされ近年注目を集めているが、中でも山東は学界から広く重視されている地域である。

海岱地区において、実地調査により現在までに発見された龍山文化遺跡は、章丘城子崖遺跡⁽⁸⁾、鄒平丁公遺跡⁽⁹⁾、臨淄桐林遺跡⁽¹⁰⁾、寿光辺線王遺跡⁽¹¹⁾、陽谷景陽崗遺跡⁽¹²⁾、五蓮丹土遺跡⁽¹³⁾、日照兩城鎮遺跡⁽¹⁴⁾、費県防城遺跡⁽¹⁵⁾、連雲港藤花落遺跡⁽¹⁶⁾、勝州庄里西遺跡⁽¹⁷⁾、日照堯王城遺

(8) 山東省文物考古研究所『城子崖遺址有重大発見—龍山岳石周代城址重見天日』(『中国文物報』1990年7月26日)、佟佩華『中国考古学史上の里程碑—城子崖龍山与岳石文化城址』(『中国十年百大考古新発見1990~1999』文物出版社、2001年)。

(9) 山東大学歴史系考古專業等『山東鄒平丁公遺址第四、五次発掘簡報』(『考古』1993年第4期)。

(10) 孫波『桐林田旺遺址調査与試掘』(『中国考古学年鑑2001』文物出版社)、趙輝『臨淄桐林龍山文化及岳石文化遺址』(『中国考古学年鑑2006』文物出版社)。

(11) 前掲注(7)参照。

(12) 山東省文物考古研究所『山東陽谷景陽崗龍山文化城址調査与試掘』(『考古』1997年第5期)。

(13) 山東省文物考古研究所『五蓮丹土発現大汶口文化城址』(『中国文物報』2000年1月17日)、劉延常、王学良『五蓮丹土大汶口文化、龍山文化城址和東周時期墓葬』(『中国考古学年鑑2001』文物出版社)。

(14) a 中美兩城地区聯合考古隊『山東日照市兩城鎮遺址1998~2001年発掘簡報』(『考古』2004年第9期)、b 于海広『山東日照兩城鎮遺址龍山文化圍城遺跡の発現和発掘』(山東大学東方考古中心『東方考古』第5集、科学出版社、2008年12月)。

跡⁽¹⁸⁾がある。そのうち庄里西遺跡と防城遺跡を除けば、これらの遺跡はおよそ二つの分布パターンに分けられる。すなわち、魯北山前地帯と魯東南～蘇北沿海地帯の二地域である。

(一) 魯北山前地帯

この一帯では、辺線王遺跡、桐林遺跡、丁公遺跡、城子崖遺跡のほか、やや西寄りにある景陽崗遺跡を含めた計五ヶ所の龍山文化遺跡が発見されている。

景陽崗遺跡は、魯西北平原の南、陽谷県に位置する。城跡は東北から西南方向に隅丸長方形を呈し、面積は38万㎡である。城牆の北、東、西三面の中央部分からそれぞれ城門一基が発掘された。城牆は夯築を主とし、一部堆築を組み合わせて建てられている。城内からは遺棄された河道内の砂州を基座にして造られた台基が複数発見され、面積はおそらく十数万㎡以上あり、城跡と方向が一致している⁽¹⁹⁾。龍山文化期の堆積層は遺跡の台地上に分布しているが、破壊がひどく、発見された遺構は祭祀坑⁽²⁰⁾、灰坑、窖穴、道路、夯土台基などである。出土土器の形態から、海岱文化に属すると考えられるが、河南省北部、河北省南部一帯の後崗二期文化に近似しており、年代はおよそ龍山文化の中晩期にあたるだろう⁽²¹⁾。

城子崖遺跡は、章丘市龍山鎮に隸属し、鎮東部の武源河畔にある城子崖と呼ばれる台地上に位置する。遺跡の周辺一帯は泰山北側の山前平原である。城跡はほぼ方形で、面積はおよそ20万㎡、南北の城牆にそれぞれ城門があり、南北の門を結ぶ道路も見つかっている。

城内で発見された遺構は、主に房址、水井、灰坑や墓葬などで、中でも水井が多く、比較的密集して分布している。出土品では特に土器が大変精巧で、年代は龍山文化の早期から晩期まで全体に及ぶ。

丁公遺跡は、現在の鄒平県長山鎮の平原に位置する。龍山文化の遺跡存続期間は、大体龍山文化期の全体に及ぶ。城跡は二つの時期に分かれ、早期のものは小型で、面積はおよそ6万㎡、晩期のほうは大型で、面積は15万㎡である。城牆からは木製の排水用水門が見つかっている。龍山文化期の遺構は、主に房址、水井、陶窖、灰坑、溝、路土、墓葬などである。

出土品は、土器、石器、骨角牙器、貝製品などで、晩期になると陶鬲の出土が非常に多い。この遺跡では、五行十一文字の陶文とト骨が特に重要な発見である。

桐林遺跡は、齊国古城遺跡西部から北へおよそ7km離れた場所に位置し、淄川市臨淄区鳳凰鎮に隸属する。遺跡の西側は烏河が流れ、東側は水を跨ぎ、中心部に臨河台地が広がる。遺跡の面積は230万㎡を越える。

龍山文化期の集落構造は極めて特殊で、中心部に城跡があり、外側に8つの集落がこれを囲むように点在する。城跡は内外に二つ見つかっており、早期のものは小型で晩期のほうは大型、面積はそれぞれ12万㎡と30万㎡である。内外二つの城牆からは城門五基が発掘された。城跡の集落の変遷過程は、以下四つの段階に分けられる。まず第一段階では、築城以前の一般的な集落形態であり、次

(15) 坊城考古工作隊『山東費県坊故城遺址的試掘』（『考古』2005年10期）。

(16) 孫亮、陳剛等『江蘇連雲港藤花落遺址考古發掘紀要』（『東南文化』2001年第1期）。

(17) 燕生東、劉延常『勝州市庄里西新石器時代至漢代遺址』（『中国考古学年鑑2003』文物出版社）

(18) 樂豊実『論大汶口文化的刻画圖像文字』（中国考古芸術研究中心『桃李成蹊集—慶祝安志敏先生八十寿辰』）中の注(105)参照。

(19) 王守功、李繁玲、王緒德『試析景陽崗龍山文化城址—

也談海岱文化对中原文明的影響』（山東大学東方考古研究中心編『東方考古』第2集、科学出版社、2005年）。

(20) 劉善沂、孫淮生『山東陽谷県景陽崗春秋墓』（『文博論集』山東省出版總社聊城分社、1990年）。

(21) 最近、景陽崗遺跡の発掘整理中に発見された陶罐は、形状がやや古く、おそらく龍山文化早期の中でもやや遅い時期のものであろう。ただし見つかったのはこの一点のみであり、景陽崗遺跡における龍山文化時代の開始年代については、今後のさらなる発掘調査が待たれる。

の第二段階で小城と大型の院落が出現、城牆の東側と北側に城門が設けられた。さらに第三段階になると、小城が拡張されて大城に発展し、三基の城門が建てられ、城の北部に土器一式が出土した特殊な灰坑が現れる。そして第四段階では、城が遺棄され、集落は衰退していった。



桐林遺跡の発掘現場

城内からは、住居、灰坑、窖穴、水井などが発掘され、また少数の墓葬も発見されたが、固定的な墓地は見つかっていない。出土した土器は大変精巧で、種類も豊富にあり、一般的な遺跡の出土品とは別格である。中でも大汶口文化晩期に散見される大口尊は、泥質陶と夾砂陶の二種類が共に発見されており、ほかの龍山文化遺跡では見られない大変貴重なものである。

辺線王遺跡は、寿光県孫家集鎮の辺線王村北部、弥河古河道両川間にある台地上に位置し、面積はおよそ10数万㎡である。

遺跡からは内外二つの城跡が発見されており、平面の形状は隅丸方形である。建造時期は内側のほうが早く、外側の城跡の東南部に位置し、面積はおよそ1万㎡で、二基の城門がある。外側の城跡はやや遅く、内側の城跡が遺棄された後に拡張されたもので、面積は5万7千㎡を越え、三基の城門がある。また、城牆の基礎部分からは人間や動物の生贄を埋めた奠基坑が見つかった。

(二) 魯東南～蘇北沿海地帯

この一帯では、計四ヶ所の龍山文化遺跡が発見されており、北から南へ順に丹土遺跡、両城鎮遺跡、堯王城遺跡、藤花落遺跡である。

丹土遺跡は、五蓮県潮河鎮の丹土村に位置し、東南4.5キロの場所に有名な両城鎮遺跡がある。遺跡は内側から外側に向かって大汶口文化晩期、龍山文化早期及び中期、合わせて三ヶ所の城跡が発見されており、形状はほぼ楕円形、面積はそれぞれ9.5万㎡、11万㎡、18万㎡である。そのうち龍山文化早期の城跡から三基の城門が、龍山文化中期の城跡からは四基の城門が発掘された。後者からはさらに三基の水門と、貯水、送水、排水が一体となった水利システムが見ついている。

城内の居住区は全て平地式住居で、所々に灰坑や墓がある。各遺構の台基は、ほとんどが建築物の堆積によって形成されたもので、このような台基は城内で数多く発見されている。これは、居住区の安定が常に保たれていて、早期と晩期とで集落の形態に大きな変化がなかったためである。

また、丹土遺跡で最も重要な出土品は、鉞、璧、戚、刀、牙璧、璋などの豊富な玉器である。

両城鎮遺跡は、日照市両城鎮一帯に位置し、両城河が北から流れ、東は黄海からおよそ6km離れた場所にある。沈海高速道路と国道204号線が遺跡付近を走っている。

遺跡の範囲はおよそ100万㎡あり、文化堆積層は2m前後、最も厚い層で5mに達し、龍山文化の主要遺跡である。龍山文化期の集落は、三重の環濠構造になっており、最も小さい内濠で面積は20万㎡以上、外濠の面積は80万㎡を越える。中間の環濠からは城牆が発見されており、内外の両環濠にもおそらく同様の城牆が存在したと思われる。

丹土遺跡と同様、城内の居住区は台基を形成している。これまでの発掘調査ですでに百余基の墓葬を整理しているが、固定的な墓地は見つかっていない。精巧な土器が大量に出土しており、また海岱地区において最も玉器の出土が多い遺跡の一つでもある。玉器の器形は主に鉞が多く、ほかに圭、璧、簪、刀などがあり、特に精緻な獣面文が施された圭は龍山文化を代表する玉器である。

中米の共同考古学調査隊が1995年以来行ってきた調査によれば、両城鎮遺跡は、魯東南沿海地域における中心的な遺跡の一つで、周辺からは同時期の遺跡が数多く発見されており、規模から見て集落の階級差があることから、典型的な求心性を有する集落形態であったことが分かる。

堯王城遺跡は、日照市高興鎮の堯王城村に位置し、南は傅疇河の支流に臨み、東は黄海を望む。沈海高速道路と国道204号線が遺跡付近を走っている。

遺跡の堆積層は厚く、大汶口文化晩期から開始されている。元々は五つの集落が支流を跨いで集まっていたが、龍山文化期になって一つの巨大な集落に発展した。2012年から2013年にかけて行われた最新の発掘調査によれば、城跡は南北に長方形を呈し、面積は数十万㎡に及ぶ。また1984年の発掘では、各房址に対してそれぞれ小型の墓葬群が配置される現象が見つかっており、龍山文化期の社会の基層構造について理解する上で重要な発見である。

藤花落遺跡は、連雲港市開発区の雲郷西諸朝村の南部、南雲台山と北雲台山の谷間にある沖積平原に位置する。

城跡は内外二層に分かれており、発掘調査によれば両者は同時期に存在したとされるが、我々山東の考古学研究のこれまでの経験から判断するに、両者は早期と晩期の関係にあったと考えるのが妥当であろう。おそらく建造時期は内側のほうが早く、外側は遅れて形成されたものと思われる⁽²²⁾。内側の面積は4万㎡、外側の面積は14万㎡で、両者の形状はよく整っており、ほぼ長方形に近い。

また、城内の三ヶ所から夯築状の台基が発掘され、台基上からは密集した住居跡が見つかった。丹土遺跡と両城鎮遺跡の発掘経験から見て、これらのいわゆる夯築台基は、複数の房址の盛り土が長い時間を経て堆積し、徐々にあたかも台基のように形成されていったものであろう。通常、盛り土は、突き固めたり圧搾などの加工を経て整地される。そのため、堆積層の断面をみただけでは、夯築技術を用いて造られた台基と極めて混同しやすいのである。このように、藤花落遺跡もまた北側の丹土遺跡や両城鎮遺跡と同様、大規模な居住区が存在し、各住居が互いに分けられていた。これも、城内が比較的安定していたからにほかならない。

以上見てきたように、龍山文化の遺跡群は、各自が単独で存在していたのではなく、周辺地域の集

(22) 樂豊実『關於海岱地区史前城址的幾個問題』(山東大学 東方考古研究中心編『東方考古』第3集、科学出版社、2006年)。

落が互いに関係し合い、城市を中心として相対的に独立した社会集団を形成していた。このような社会集団の性質については、学者によって様々な見解がなされており、例えば酋邦⁽²³⁾や古国⁽²⁴⁾、邦国、或いは初期の都市国家⁽²⁵⁾など、認識は多岐にわたっている。

(23) 劉莉著、陳星燦等訳『中国新石器時代—邁向早期国家之路』(文物出版社、2007年)。

(24) 張学海『城子崖与中国文明』(『張学海考古論集』学苑出版社、1999年12月)。

(25) 孫波『山東龍山文化城址略論』(中国社会科学院考古研究所等編『中国聚落考古の理論与实践—記念新砦遺址発掘30周年學術検討会論文集』科学出版社、2010年12月)。

近年来山东地区新石器时代考古发现与初步研究

孙 波

山东现代考古学是以新石器时代考古为发端的，1930年代初当时中研院史语所对城子崖遗址的发掘正式揭开了山东新石器时代考古的序幕。其后，历经近一个世纪的跋涉，山东地区新石器时代考古取得了巨大成就，建立起中国境内最为完善的古文化发展谱系。近年来在過去的基础上，伴随着中国考古学的转型，山东新石器时代考古又取得了新的进展。



一、山东省地理简介

山东省位于中国大陆的东部，东端即胶东半岛探入渤海和黄海之间，隔海北与辽东半岛、东与朝鲜半岛和日本列岛相望。西部作为华北大平原的一部分，分别与河南省和河北省搭界，南面与苏皖两省北部的淮北平原相接。历史上特别是商代以前，如今作为行政区域的山东省并不能完全覆盖处于黄河下游的东方文化区，故而考古学家才有了海岱历史文化区的提出¹。新石器时代时期的海岱历史文化区，除了山东省以外，大概还要包括豫东和苏皖两省北部。

山东地区为北温带大陆性气候，四季分明，夏冬季长，春秋季节短。如果以降水衡量的话，全年也可以分成干湿两季，冬春干冷，夏秋湿热。雨热同步，适宜农业发展，可以保证作物一年两熟。由于季风气候的特点，夏季风携水汽由东南海面上来，所以降水量由东南向西北梯次降低。而冬季风由西北吹来，温度也是由西北向东南梯次升高的。

地形上山东大体上以中部的泰鲁沂诸山为脊，沿着胶东丘陵向东形成半岛，环绕在鲁北和鲁西的是华北大平原和黄淮平原的一角。泰鲁沂诸山不仅是南北分区的界标，也是本地河流的发源地，还是山东南北渤海和黄海两大水系的分水岭。这些山脉的南北两侧地理环境存在相当区别，山北为鲁北平原，山南

1 高广仁、邵望平：《中华文明发祥地之一——海岱历史文化区》，

《史前研究》1984年第1期。

是丘陵浅山区，自古造就了两地不同的文化传统，也是齐鲁之别的由来。

各地自然地理环境不同，物产本异，伴风土而生的民众自然就形成了不同的人文传统。然而，山东在史前的中国整体上一直是一个稳定的板块，区内各地文化虽然各具特点，但它们之间的共性还是远远大于差异。其因概缘于山东虽然在地理上可以分成多个单元，但这些单元是开放的，其间应该存在密切的交流互动，才能形成一个相对独立的文化圈。

二、已有考古成就

经过多年努力，在上个世纪八九十年代山东地区已经建立了比较完善的新石器时代考古学文化谱系：后李文化——北辛文化——大汶口文化——龙山文化，其绝对年代从公元前 6000 年前后，一直延续到公元前 2000 年左右。在此基础之上，我们大体可以勾勒出山东地区新石器时代社会发展的粗略过程。文化与社会发展的阶段性具有大体相似的节奏。

后李文化 距今约 8500——7500 年，分布于泰沂山地北侧山前的黄土带上，目前发现约 20 处遗址。后李文化的陶器均为夹砂陶，以红陶为主，器形主要是各类釜，还有罐、盆、钵、壶、箕形器、孟等。石器比较发达，磨制者往往很精致，可见斧、锛、凿等，还常见磨盘、磨棒。

后李文化遗址一般滨河而居，由于经常搬迁，留下的遗址面积较大，往往达到数十万平方米，但属于共时的聚落面积并不大。该文化聚落一般分成两部分：居址区和墓地。墓地主要见于章丘小荆山遗址，发现了 3 列整齐的墓葬，墓内基本不见随葬品。显示了一种早期的平等有序的氏族关系。居址区的发现比较普遍，多有成片房址。房址按规模分两类：大房址一般有灶和成组陶器，建筑较好，面积往往在四五十平方米，最大的可达七八十平方米，室内功能区划（如休息、炊饮、物品置放等区分）较明确；小房址建筑较次，没有灶和完整陶器，室内功能区划不明显，面积往往不到 20 平方米。

后李文化聚落是由多个社区组成的，但聚落的统一性并不强，没有发现能够统摄全局的中心，整体上呈现出松散的开放型结构。相反，在社区内部却是另一番景象，发掘揭示社区是由多个生活单位组成的十分紧密而有序的社会单元，具有共同的经济生活，可能承担着基本的社会职责。

后李文化属于农业初兴、聚落勃发阶段，对环境依赖性强，资源开发利用效率低。遗址一般都位于山前平原上的河畔地带，不独突出了对水源的依赖，也显示了对山区与河畔附近多样性资源的依赖。这暗示当时长距离获取资源的手段与能力可能不足，对环境资源的开发以直接和简单的手段为主，欠缺深加工的能力。特别是遗址巨大的规模、单薄的文化堆积以及聚落内部的分区，反映的是频繁迁徙的农业村落生活，其背后因人口繁殖带来的土地压力恐怕还在其次，早期农耕社会对土地资源利用的低效可能才是直接原因，显现出初民社会那种开发程度低、与环境相溶的早期状态。

北辛文化 距今约 7500——6100 年，分布于全省，目前发现约上百处遗址。

聚落的整体情况并不清楚，房址多小型单室，以椭圆形、圆形者居多，另有少量方形者。以半地穴和浅穴式为主，晚期地面式建筑增多。墓葬分土坑竖穴和陶棺墓两类，存在少量石棺墓。多数没有随葬品，少数有 1-3 件左右。墓中随葬品因性别不同而有所区别，男性常随葬骨镞、矛等武器，女性主要随葬日常生活用品。

陶器中夹砂陶多于泥质陶，另有少量麇碎蚌壳、云母或滑石陶。陶色以红褐、红、灰黑陶为主。器表素面为主，纹饰多见于夹砂陶，主要有附加堆纹、压划纹、锥刺纹等，也发现极少量彩陶。器形主要有鼎、罐、釜、小口双耳罐、钵支脚等，尤以鼎、钵常见。石器主要有铲、斧、锛、凿、刀、镰、磨盘、磨棒、镞等。

以目前资料，我们还难以对北辛文化社会做出准确推测。不过北辛文化中来自淮河流域裴李岗文化的

因素很强，表明山东地区社会发展开始受到外部环境的强烈影响。

大汶口文化 距今约 6100—4600 年，分布于全省，还发现于苏皖北部、豫东以及河南中部，甚至到达洛阳地区，遗址数量几千处。无论是覆盖范围，还是遗址数量，相较北辛文化，都可以说是产生了质的飞跃。

陶器制造业发达，出现了轮制技术，早期阶段彩陶富于特色，代表性的器物有鼎、觚形杯、豆、鬲、盃、背壶、大口尊等，造型精致，富于变化。玉石器主要有铲、斧、镑、凿、刀、钺、镞等及各类饰件。其它还有象牙质的雕筒、獠牙勾形器、骨梳等。

聚落统一性变强，居址与墓地分开。房子分地面式和半地穴式，面积都不大，约在 10—20 平方米左右。以方形为主，圆形者也常见。墓葬往往成群埋葬，数量较多，但墓地内部也出现了组群的分化。墓葬基本都是长方形土坑竖穴，方向多数向东，有的有二层台，出现了棺槨。从一开始，就出现了厚葬的风气，但随葬品数量和质量往往差别较大。体质人类学研究发现大汶口人有拔牙、头骨变形、口含小球等习俗。

大汶口文化历时 1500 年，发展经历了平等社会到分层社会的转变。早期阶段社会大致平等，聚落的统一性较强，房子排列极有规律，差别不大，拥有一定公共活动空间，居址内灰坑、窖穴等其它遗迹少见。基本还是遵守严格的氏族生活原则，很少见到不平等的现象，但在少数中心遗址如大汶口遗址的墓葬中出现了随葬品严重不平衡现象，大墓中随葬品不仅数量多，而且种类丰富，品质上层，而一些中小型墓葬则仅见了了数件低劣的随葬品或者一无所有。到了中期阶段，这种不平衡现象开始加剧和扩散，大墓中新出现了玉器和象牙器。晚期阶段，出现了城址这一新的聚落形态，表明社会矛盾已经发展到需要大规模武力来协调解决的阶段。这时期不仅中心聚落，就是一般聚落也普遍产生悬殊的贫富分化，表明过去那种平等的社会生活已经被多个社会层级分割，社会等级开始趋于复杂、明显，新的时代即将来临。

龙山文化 距今约 4600—4000 年，分布区与大汶口文化接近，但数量几乎是其三倍。

龙山文化最著名的特征是精巧的黑陶，其中以胎薄如蛋壳的高柄杯为制陶工艺的最高代表。轮制技术得到普遍推广，甚至连鬲、甗、甗的袋足也能轮制。典型器类还有：鼎、盆、罐、壶、尊、罍、杯、盘、豆等，每类器物都有很多型式上的复杂变化，整体器物群在史前阶段最为庞杂。其中酒器、食器、炊器、盛器可能都有明确分类，功能趋于专门化。

农业生产得到快速发展，这可能与人口数量上升、垦田面积扩大、家户规模变小有关，同时与稻作开始大量出现也有密切关联。手工业中制陶业不仅高度专业化，社会化生产程度也逐渐加强，轮制技术广泛应用，器形器类变化繁多，磨光黑陶成为龙山文化的标志。玉石器发现不多，但礼制化倾向明显，以西朱封玉器为代表的雕刻技术达到史前文化顶峰。

龙山文化无论是聚落还是人口的数量与密度都有一个飞速提升，达到新石器时代的峰值。聚落的等级分化更加严重，城址的普遍出现，至今已经发现 12 座，由城址为中心带动周围聚落发展的模式成为一种新的社会气象，各城址所代表的城市之间的联系也得到普遍加强。这对地区社会的发展产生了深刻影响，社会分化展现了新的迹象：墓葬摆脱纯粹夸富，厚葬风气减弱，一些大墓转而追求墓圪体量、棺槨、玉器、精致陶器等，更加注重随葬品的品质和配伍关系，社会等级的表现开始走向了制度化。

三、近年来新的考古发现

1、龙山文化年代学新进展

山东龙山文化处于新石器时代末期²，由大汶口文化发展而来，演变成岳石文化，具体年代约为距今 4600—4000 年³。根据最新的年代学研究，山东龙山文化与中原龙山文化一样要普遍向后推移二、三百

年,大约在距今4300—3800年之间⁴。然而比较表明,山东龙山文化可能一直延续到二里头文化一期⁵,因此其下限较中原龙山文化还要晚一些,也许要延伸到二里头文化最新的年代上限公元前1750年⁶,甚至更晚,跨过二里头文化一期,直到公元前1700年。诚如此,山东龙山文化新的年代范围是公元前2300—公元前1700年,积年600,正好与陶器分期推定的结果相一致。

2、新石器时代早期文化的突破

扁扁洞遗址的发现,首次为探索山东新石器时代文化的起源及早期发展提供了明确线索。对之进行的调查和发掘,使山东第一次获得了与其它地区新石器时代早期文化可资对比的材料,相关研究第一次有了可以展开的支点。

扁扁洞遗址位于沂源县张家坡镇北桃花坪村北山崖西壁上,地理坐标为北纬36°03′42″,东经118°28′17″,海拔389米。洞穴周围环境宜人,有多眼泉水,经年不涸。洞内地层堆积分8层,其中①~④层为文化层,⑤~⑧层为自然堆积。遗迹有灰坑、烧土面、烧土坑、灶坑等。

遗物主要是陶、石、骨器,数量都很少。陶器很破碎,没有复原者,均属夹砂陶,以红色为主,整体上火候较低,陶胎较厚,均为素面。多数陶片表面较为平整,有的可见刮抹痕,看来经过整形。可辨别的器形只有釜、钵两类,器腹较深,有圜底和平底两种,平底多见。石器发现很少,其中1件磨盘和2个磨棒为磨制,其它只有数片简陋的石片、石核和一些断块、残片等,不见成型器。骨器有锥、镖和针,磨制,针的尾端有穿孔。另有1件动物肩胛骨,翼端被平截,经过打磨,类似骨铲,可能也是一件有待进一步加工的半成品。

人工制品以外,动物骨骼数量最多,但都很破碎,据观察应为人工敲砸所致,有些经过火烧。这些兽骨显然是人类猎物,以中小型哺乳动物为主,常见鹿类。浮选的植物遗存种类少见,主要是一些可食的树籽如类,对石磨盘棒的淀粉粒初步检测只发现一个淀粉粒,可能属于坚果类。

经过测年,扁扁洞遗存处于新石器时代早期,具体年代距今约9500—10000年左右。

扁扁洞遗址属于洞穴遗址,遗址规模反映当时人类群居的单位还小,穴居的习惯显然是从旧石器时代继承延续下来的,此时人类虽然已经跨入了新石器时代,但是生活方式仍然难以褪去上个时代的烙印,营建居室的能力还很弱。

遗址中发现大量兽骨,还有与采集经济相伴的石磨盘棒,骨镖的发现有两种可能:一种暗示鱼类可能也是被利用的食物资源之一,二这种工具仍然是狩猎用的。农业遗留虽有发现,仍需进一步确定。即使这时已经开始了农业活动,作物的驯化程度、种植的规模、农业技术等初期条件也限制了农业作为食物来源的比重。同时,扁扁洞由于位置较高,距山下能够进行农业活动的地方较远,不太适合农业生产,其选址就说明当时并不是从农业生产的角度考虑的。所以,对当时先民来说,狩猎采集仍然是其经济活动的主要方式。

扁扁洞遗址的发现和多次发掘为探索山东新石器时代文化的起源及早期发展提供了重要线索,同时对研究鲁中山区旧石器时代向新石器时代文化的过渡以及原始农业的起源问题都具有重要意义⁷。

2 在中国也有不少学者把龙山文化定位为铜石并用时代文化。参见严文明:《论中国的铜石并用时代》,《史前研究》1984年第1期。

3 栾丰实:《海岱龙山文化的分期和类型》,载氏著《海岱地区考古研究》,山东大学出版社,1997年6月第一版。

4 参见将要出版的中华文明探源工程(二)年代学课题结项报告。

5 栾丰实:《海岱系文化在华夏文明形成过程中的作用——从海岱、中原两大文化区系的相互关系谈起》,《华夏文明的形成与发

展》,大象出版社,2003年10月。方辉:《二里头文化与岳石文化》,《中原文物》,1987年第1期。

6 仇士华、蔡莲珍、张雪莲:《关于二里头文化的年代问题》,载杜金鹏、徐宏主编:《二里头遗址与二里头文化研究》,科学出版社,2006年12月第一版。

7 孙波:《扁扁洞初识》,安徽文物考古研究所编《文物研究》第16辑,科学出版社,2009年。

3、聚落考古的新收获

(1) 西河遗址

西河遗址位于章丘市与济南市历城区之间的巨野河支流西河边上，西距城子崖遗址 1.6 公里，面积约 40 万平方米。1997 年和 2006 年进行了 2 次正式发掘，揭露了一处后李文化聚落社区，面积近 2500 平方米。

这处社区位于遗址的中部偏西，经过考古清理共计发现 20 余处房址，还有少量灰坑。房址分大小两类，大者面积约 20—70 平方米，形状较规整，都是进深大于面阔的圆角长方形，居住面、穴壁加工较好，室内一般居中设一组三个灶，有主副之分，有的灶上仍然存留着陶釜，地面上也往往摆放许多完整陶器，多位于角落里。还有一些石质工具，有磨盘、磨棒、锤、斧、砺石等，以谷物加工和工具制作用具为主。小房子面积一般介于 10—20 平方米之间，居住面、穴壁无加工痕迹，没有灶，也不见完整陶器，有些地面上铺满碎陶片，并发现不少石片与石块，可能是制作石器过程中废弃的下脚料。因此这些小房子有些可能属于储藏室，有的可能就是专门的手工操作间，同时也不排除主人的可能，但显然并不具备完整的生活功能。

可以看出来，这里展现给大家的是以生活单位为基础来组织规划的社区图景。大房子生活设施齐全，每座大房子都是一个生活单位的主体，居主导地位，分居外围，小房子属附属设施，居于大房子南侧，处于被看管的位置，应属于大房子共有的附属设施。

(2) 黄崖遗址

黄崖遗址位于沂源县土门镇黄崖村东侧河畔，大部遭到破坏，仅存洞尾，可见三层堆积，均为垃圾层。出土陶片较少，可见釜、钵、鼎等器形。夹砂陶为主，钵为泥质陶。陶色以红色和红褐色为主，也有部分褐陶、黄褐陶和灰褐陶，少量接近黑色。整体上火候较低，也不均匀，有的陶片表面呈红褐色，内面呈灰褐色，褐陶和灰褐陶硬度较红陶和红褐陶稍高。

黄崖遗址测年距今约 7200 年，属于北辛文化早期。出土的釜几乎都是叠沿，形态比较规整，显示了与后李文化较直接的传承关系。同时在新石器时代中期晚段，作为洞穴遗址是较为特殊的，显示了当时人类行为方式的多样性。

(3) 大汶口遗址

大汶口遗址是中国著名的考古遗址，曾进行过 3 次大规模发掘。特别是 1959 年的发现曾震惊了当时学界，引起了对中国史前社会性质和发展水平的激烈讨论。

2012—2013 年为配合国家考古遗址公园建设，山东省文物考古研究所又对之进行了第 4 次发掘，发现了大汶口文化早期阶段的一处居址，清理了 7 座保存较为完好的房址。

发掘区位于大汶口遗址汶河北岸部分的中部，7 座房址属于该处居址区的东部，再向东是一片被填平的洼地，作为该处居址的活动广场。发掘揭示，这处居址布局严谨，房址分布规律清晰可循，展示了极强的整体性。从形制来讲，各个房址几乎完全形同，均为近方形地面建筑，面积都是 4.2 米见方左右，房址间的空地面积亦相当，说明当初应该有较严密的规划。房址倒塌堆积中和室内地面上中发现了大量遗物，包括陶器、石器、骨器和兽骨等。陶器包括鼎、罐、釜、钵、壶、钵、缸等，石器多发现于房址上层烧土堆积中，大都残碎，器形有石斧、磨棒、磨盘等，还可见一些形体较大并未加工过的片状石块。

每座房址上面都堆积着大量红烧土，范围与房址大体相合，红烧土内也夹杂一些陶石残器。根据保存状况和一些二次过火的痕迹分析，这批房址毁于火灾。灾后对现场进行了整理，将整个居址重新铺垫了一层，形成了新的活动面。不知出于什么原因，当时没有再继续利用新的活动面，而是整个聚落都迁移到汶河南岸去了。对此，有专家推测为水患，因为汶河南岸地势显著高于北岸。

(4) 龙山城址

史前城址代表了当时社会发展的最高形态，近年来受到广泛关注，各地陆续有不少新发现，其中山东是

学界普遍看重的地区。

海岱地区目前经过可靠田野工作发现的龙山文化城址有以下几处：章丘城子崖⁸、邹平丁公⁹、临淄桐林¹⁰、寿光边线王¹¹、阳谷景阳岗¹²、五莲丹土¹³、日照两城镇¹⁴、费县防城¹⁵、连云港藤花落¹⁶、滕州庄里西¹⁷、日照尧王城¹⁸。这批城址除了庄里西和防城外，余者可分成两个带状分布群，一个是鲁北山前地带，一个是鲁东南苏北沿海。

（一）鲁北山前地带

有边线王、桐林、丁公、城子崖四处，如果算上偏西的景阳岗本地区共发现了5座龙山城址。

景阳岗城址 位于鲁西北平原南缘，属于阳谷县。城址为东北—西南方向，平面略呈圆角长方形，面积38万平方米，在城墙北、东、西三面中部各发现一个城门。城墙以分块夯筑为主，结合堆筑建成。城内发现以废弃河道内沙洲为基座修筑的多个台基，面积可达十几万平方米，方向与城址一致¹⁹。龙山文化堆积分布在台地上，但遭到严重破坏，发现的遗迹现象有祭祀坑²⁰、灰坑、窖穴、道路、夯土台基等。陶器群反映的文化面貌整体上仍属于海岱系，但与豫北冀南一带的后岗二期文化比较接近，时代上大致处在龙山文化中晚期²¹。

城子崖城址 隶属章丘市龙山镇，遗址坐落在镇东武原河畔称为“城子崖”的台地上。遗址周围一带为泰山北侧的山前平原。城址略成方形，面积约近20万平方米。在南北墙上有门，两门之间有道路连接。

城内发现遗迹主要有房址、水井、灰坑和墓葬等。其中水井有多口，分布比较密集。出土遗物特别是陶器精美大气，时代基本覆盖了整个龙山文化。

丁公城址 今属邹平县长山镇，地处平原。龙山文化遗存延续时间大致可以包括龙山文化的全过程，城址有两个阶段，早期较小，面积约6万平方米，晚期较大，面积15万平方米。城墙上发现排水的木构水门。龙山文化的遗迹主要有房址、水井、陶窑、灰坑、沟、路土、墓葬等。

遗物包括陶、石、骨、角、牙、蚌等质地，晚期陶器数量甚多。其中以刻有5行11个文字的陶书文字和卜骨等较为重要。

桐林城址 位于齐国故城西面略偏北约7公里处，隶属于淄博市临淄区凤凰镇。遗址西傍乌河，东跨澧水，中心为一处临河台地。整个遗址面积约230余万平方米。

8 山东省文物考古研究所：《城子崖遗址有重大发现——龙山岳石周代城址重见天日》，《中国文物报》1990年7月26日。佟佩华：《中国考古学史上的里程碑——城子崖龙山与岳石文化城址》，《中国百年百大考古新发现》（1990—1999），文物出版社，2001年。

9 山东大学历史系考古专业等：《山东邹平丁公遗址第四、五次发掘简报》，《考古》1993年第4期。

10 孙波：《桐林田旺遗址调查与试掘》，《中国考古学年鉴·2001》，文物出版社。赵辉：《临淄桐林龙山文化及岳石文化遗址》，《中国考古学年鉴·2006》，文物出版社。

11 同注释7。

12 山东省文物考古研究所：《山东阳谷景阳岗龙山文化城址调查与试掘》，《考古》1997年第5期。

13 山东省文物考古研究所：《五莲丹土发现大汶口文化城址》，《中国文物报》，2000年1月17日。刘延常、王学良：《五莲丹土大汶口文化、龙山文化城址和东周时期墓葬》，《中国考古学年鉴·2001》，文物出版社。

14 a 中美两城地区联合考古队：《山东日照市两城镇遗址1998~2001年发掘简报》，《考古》2004年第9期。b 于海广：《山

东日照两城镇遗址龙山文化围城遗迹的发现和发掘》，山东大学东方考古中心：《东方考古》第5集，科学出版社，2008年12月。

15 防城考古工作队：《山东费县防防城遗址的试掘》，《考古》2005年10期。

16 孙亮、陈刚等：《江苏连云港藤花落遗址考古发掘纪要》，《东南文化》2001年第1期。

17 燕生东、刘延常：《滕州市庄里西新石器时代至汉代遗址》，《中国考古学年鉴·2003》，文物出版社。

18 栾丰实：《论大汶口文化的刻画图像文字》之注释105，中国考古艺术研究中心：《桃李成蹊集——庆祝安志敏先生八十寿辰》。

19 王守功、李繁玲、王绪德：《试析景阳岗龙山文化城址——也谈海岱文化对中原文明的影响》，山东大学东方考古研究中心编《东方考古》第2集，科学出版社，2005年。

20 刘善沂、孙淮生：《山东阳谷县景阳岗春秋墓》，《文博论集》，山东省出版总社聊城分社，1990年。

21 最近在整理景阳岗遗物时发现了一件陶罐，形制较早，应该进入龙山文化早期晚段。但仅此一件，所以该地龙山文化开始年代还有待于进一步工作来发掘。

桐林遗址龙山时期聚落结构比较特殊，中心为城址，外围8片互不相连而又相邻的聚落。城址一早一晚，一小一大分别为12万和30多万平方米，内外两道城墙上共发现5处城门。城址的聚落变迁可分四个阶段：第一阶段，筑城之前属于一般聚落；第二阶段，早期小城与城内大型院落一起出现，城墙的东、北两面发现城门；第三阶段，小城扩展成大城，发现3座城门，城北部发现了出土成组陶器的特殊灰坑；第四阶段，城址废弃，聚落处于衰退中。

居址内有房子、灰坑、窖穴、水井等，还发现零星墓葬，未见专门墓地。出土陶器十分精美大气，器类庞杂，远超一般遗址出土品。其中大汶口晚期常见的大口尊，泥质和夹砂两类皆有发现，显非一般物类，为其他龙山遗址未见。

边线王城址位于寿光县孙家集镇边线王村北，坐落在弥河两条古河道之间的一个台地之上，面积约10多万平方米。

遗址上发现两道城圈，圆角方形，内圈较早，处于外圈东南部，面积约1万平方米，发现2座城门；外圈较晚，属于内圈废弃后扩建，城内面积57000余平方米，发现3座城门。城墙基槽中发现用人和动物奠基现象。

（二）鲁东南—苏北沿海地带

本区共发现4处龙山城址，由北向南依次为丹土、两城、尧王城、藤花落。

丹土城址位于五莲县潮河镇丹土村，东南至著名的两城镇遗址约4.5公里。发现了由里及外依次相叠的大汶口文化晚期、龙山文化早期和中期三个城圈，形状近椭圆形，城内面积分别为9.5、11、18万平方米。其中龙山早期城圈发现3座、龙山中期城圈发现4座城门。后者还发现了3座水门以及蓄、输、排有机地结合在一起的城市水循环系统。

城内居址分区，均地面式房子，间或有些灰坑和零星墓葬，各类遗迹主要是房子垫土层层相叠，形成台址。这样的台址城内存在多个，反映了各居址区比较稳定，早晚之间城市格局变化不大。

丹土最著名的发现还是数量丰富的玉器，包括钺、璧、戚、刀、牙璧、璋等。

两城镇城址位于日照市两城镇一带，两城河从北面流过，东距黄海约6公里。沈海高速公路和204国道从遗址附近经过。

遗址范围在百万平方米左右，文化堆积厚度一般2米左右，最厚处可达5米，龙山文化为遗址主体。龙山时期聚落有三重环壕，最小的内壕面积超过20万平方米，外壕面积超过80万平方米，中间环壕内侧发现城垣，相信内外环壕也应该存在相应的城垣。

与丹土一样，城内居址分区，最后也形成台址。历次发掘共清理100多座墓葬，没发现固定的墓地。出土陶器丰富，器形精美，同时也是海岱地区出土玉器最多的地点之一，器形以钺为主，还有圭、璧、簪、刀等，圭首刻画繁缛的兽面纹，为龙山文化玉器中的精品。

中美联合考古队1995年以来进行的系统调查表明，两城镇遗址是鲁东南沿海地区的中心之一，外围发现大量同时期遗址，可按规模划分出不同聚落等级，表现了典型的向心式区域聚落布局模式。

尧王城城址位于日照高兴镇尧王城村，南临傅疃河支流，东望黄海。沈海高速公路和204国道从遗址附近经过。

遗址堆积丰厚，始于大汶口文化晚期，当时有五处聚落团聚在从中穿过的河汊附近，到了龙山时期扩展成一个超大型中心聚落。2012—2013最新发掘表明，城址呈南北长方形，面积数十万平方米。1984年的发掘发现了位置不同的房址对应不同小型墓葬群的现象，有助于了解龙山时期的基层社会结构。

藤花落城址位于连云港市开发区中云乡西诸朝村南部，处在南北云台山之间的谷地冲积平原上。

城址分内外两圈，据发掘两圈存在共时关系，不过依据山东地区普遍经验来看，两者应该主要是早晚

关系,很可能内圈较早,外圈较晚²²。内圈面积4万平方米,外圈面积14万平方米,两者形状都十分规整,接近长方形。

城内发现三处夯土台基,其上有比较密集的房屋建筑。从丹土和两城镇的发掘经验来看,这些所谓夯土台基很可能是不同房址层层叠压逐渐形成的,由于城内居址区十分稳定,时间长了层层叠压的房址垫土慢慢就形成了类似台基的模样,而房址垫土一般经过夯砸、碾压性的加工,类似夯土层,所以只从剖面上观察极易与夯筑的建筑台基相混淆。如是,则藤花落城内与其北面的丹土、两城镇一样存在大面积的居址区,不同的居址区之所以能够相互区分,实反映了当时城内居民的社区比较稳定。

龙山文化每个城址都不是独立存在的,周围区域都有相关的普通聚落,它们一起构成了相对独立的以城址为核心的区域社会单元。关于这种社会单元的性质,不同学者有不同的认识,有的认为是酋邦²³,有的认为属于古国²⁴,或称之为邦国,还有的认为属于初期城邦类型的国家²⁵。

22 栾丰实:《关于海岱地区史前城址的几个问题》,山东大学东方考古研究中心编《东方考古》第3集,科学出版社,2006年。

23 刘莉著陈星灿等译:《中国新石器时代——迈向早期国家之路》,文物出版社,2007年。

24 张学海:《城子崖与中国文明》,《张学海考古论集》,学苑出

版社1999年12月。

25 孙波:《山东龙山文化城址略论》,中国社会科学院考古研究所等编:《中国聚落考古的理论与实践——纪念新砦遗址发掘30周年学术研讨会论文集》,科学出版社,2010年12月。